

賛美をもって 主の前に出る

詩篇100:1~5



感謝の賛歌

100:1 全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。

100:2 喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。

100:3 知れ。主こそ神。主が、私たちが造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。

100:4 感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。主に感謝し、御名をほめたえよ。

100:5 主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実はやがて至る。



神さまの臨在の前に出る方法

詩篇の100篇には、神様の臨在の前に出る方法が記されている。それは感謝と賛美である。普通、平民が国の指導者や王様の前に出る時には、そのための謁見法が教えられる。

かつけん

賛美は天的な謁見方法

主の主、王の王であられる方の前に出たため、私たちクリスチャンの天的謁見方法は、賛美をもって出ることである。この点を理解すると、教会の集会賛美がどれほど大切な時であるかが分かってくる。

聖書が命じる方法

集会賛美のひとつは、皆が集まるまでの時間の穴埋めのようなものではなく、また集会を温かく、親しくさせるための雰囲気作りでもない。賛美は主の前に出たための、聖書が命じる方法である。

賛美はクリスチャンの生き様

私たちは、毎瞬毎瞬、主の臨在の前に歩むことが許されている。このことを理解する時、賛美が単に決められた時間内だけのことでなく、賛美はクリスチャンの「生き様である」と言える。

主にほめ歌を歌え

149:1 ハレルヤ。主に新しい歌を歌え。聖徒の集まりで主への賛美を。

149:2 イスラエルは、おのれの造り主にあって喜べ。シオンの子らは、おのれの王にあって楽しめ。

149:3 踊りをもって、御名を賛美せよ。タンバリンと立琴をかなでて、主にほめ歌を歌え。

149:4 主は、ご自分の民を愛し、救いをもって貧しい者を飾られる。

149:5 聖徒たちは栄光の中で喜び勇め。おのれの床の上で、高らかに歌え。

日々、感謝と賛美を持って主の前にでていく時、主は私たちに喜びと楽しみを与えられる。



ダビデの模範

イスラエルの歴史の中で賛美を全盛期に至らせたのは、ダビデ王でした。最初の聖歌隊、オーケストラ、歌い手、指揮者を立てたのはダビデであった。彼は、賛美は主の臨在の前でされるものであることを、よく認識していた。

1 歴代13:8 ダビデと全イスラエルは、歌を歌い、立琴、十弦の琴、タンバリン、シンバル、ラッパを鳴らして、神の前で力の限り喜び踊った。

主に向かって

歌い手を選ぶ時、彼は、神の臨在を現わす契約の箱の前での働きであることを注意深く示した。詩篇の中には、繰り返し、繰り返し、「主に向かって歌え」という言葉が出てくる。

音楽の目的は神さまを賛美するため

現在神様は、多くの楽器を主のご栄光のために、サタンの手中より奪い返し始められた。私たちは忘れてはいけない！音楽の起源は、天国にあったということを！音楽の目的は神様を賛美するためであるということを！

天上の音楽指導者

次に記す聖書の個所が、もしサタンについて言及しているとするなら（多くの神学者たちはそれを認めている）、サタンは天上で音楽の指導をしていたように思われる。

イザヤ14:11～15「あなたの誇り、あなたの琴の音はよみに落とされ……。暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。…あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。』……」

エゼキエル28:12～19「神である主はこう仰せられる。あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった。……あなたのタンバリンと笛とは金で作られ……あなたの心は自分の美しさに高ぶり：……そこで、わたしはあなたを地に投げ出し……」

琴の音とタンバリンと笛は、サタンの活動の一つであったようだ。しかし彼は自分を誇り、高め、神様のみに属すべき賛美と礼拝を、自分のものにしようとした。

それ故に、彼は天から追放された。それ以来、サタンは、人間が彼を賛美、礼拝し、彼に従うようにと誘いかけている。

賛美と神の臨在との関わり

偉大な音楽の作詞者であったダビデの心の叫びは、「主の臨在の前におらせてください！」であった。彼は、主の臨在の前に満ち足りた喜び、永遠の楽しさを見いだすことができることを知っていた。

詩篇16:11 あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。

賛美の重要性

今日の私たちにも、同じ心の叫びがある。神様が共におられなければ、私たちは何もできない。聖書の中に出て来る賛美は、主の臨在といつも関わりがある。

また、このことのゆえに、私たちは賛美の重要性を認め、個人の信仰生活においても教会生活においても、賛美を成長させていかなければならない。

